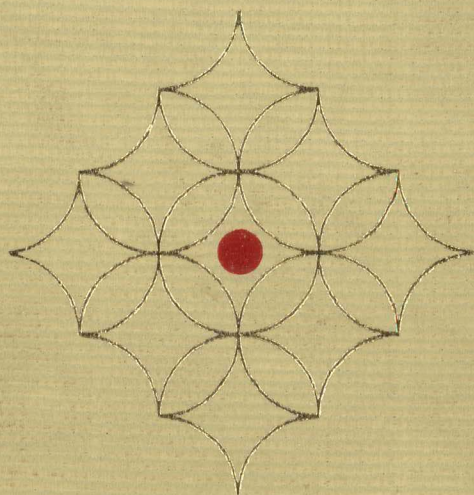




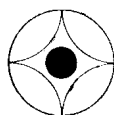
現代日本文學大系

65

井 伏 鱒 二 集
上 林 曉



筑 摩 書 房



現代日本文學大系 65

昭和四十五年八月五日
昭和四十八年九月五日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

井伏鱒二・上林曉集

著者

発行者

発行所

井上 井伏
上林 鱒二
達 曉
三

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号 一〇一―一九一

電話 東京(二九一)七六五一

振替口座 東京 四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10065 (出版社) 4604

井伏鱒二集 目次

巻頭写真

筆 蹟

さざなみ軍記

三

黒い雨

五

山椒魚

二六

鯉

二七

屋根の上のサワン

二八

「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩

して私は用語について煩悶すること

二九

へんろう宿

三〇

鐘供養の日

三一

遙拝隊長

一六

開墾村の与作

二〇

上林曉集 目次

卷頭写真

筆蹟

薔薇盗人

二九

天草土産

三三

ちちははの記

三四

野

四六

二閑人交游図

五三

明月記

二六

小便小僧

二九

夏曆

三〇

聖ヨハネ病院にて

三八

月魄

三四

御目の雫

三四

白い屋形船

三五

母ハルエ

三六

〔付録〕

習作時代

井伏鱒二

三九

井伏鱒二論

武田泰淳

四〇

井伏鱒二

杉浦明平

四一

上林 暁

青柳 瑞穂 三九

上林 暁の文学をめぐって

伊藤 整 三六

上林 暁

山本 健吉 四二

年譜

四〇

著作目録

四八

井伏鱒二集

開墾村の興作

井伏鱒二

元禄七年（甲戌）三月、備後の小呂藤では
セシヨウが奈とい小呂野を同墾地に定め、近
隣から百姓の次男三男が入植して来るやうに
奨励した。入植者には助成金のほか、秋や穀
物の種子などをも代り與へることにした。四年
は、同墾地のしきなりにしたかつ、三年同要
せしむ。

昔、旧の百姓たちには、セシヨウが奈の地はか
ゝることを知らぬ。そこで人望高き長者を
招き、その地をいかに開墾せしむべきかを
語り、

さざなみ軍記

壽永二年七月、平家一門の人々は兵乱に追われて帝都を逃亡した。次に示す記録は、そのとき平家某の一人の少年が書き残した逃亡記である。ここに私はその記録の一部を現代語に訳してみる。

七月十五日(壽永二年)

昨日の夜、原田、菊池、松浦党の人たちが、三千余騎を引率して帝都へ帰った。鎮西の謀叛をたிரけて来た由である。六波羅池殿の広場には、かがり火がたかれてあった。そのあかるみは、原田や松浦たちの姿をてらした。原田は黒い馬にまたがり、鎧を踏張りすこし立ちあがり加減にしていたので、凱旋將軍の威風があった。しかし赤色の母衣は色あせて、多くの合戦や風雨に出会ったことが推察され、私たちは気の毒に思った。菊池は、もえぎ織の鎧を着て、鉞がたをつけた兜をかぶり、二十四差した截生の矢を負い、滋藤の弓を片手にもっていた。彼は徒歩であった。彼の愛馬は、頬髯の黒い徒卒によってその手綱をおさえられていた。純白色の毛なみのたくましい馬で、いまにも庭のたき火にむかって突進しそうな様子をしてもがいていた。

七月十六日

帝都へ一つの悲報がつたわった。北国鎮定に出征したわが軍は、そのほとんどことごとくが越中のある谷間において敗亡した。死傷者の数は八千余である。

帝都には安寧なく、家々では門や戸をとじて、人々は終日、供養の

鐘をうちならしている。念仏をとなえる声は隣家へきこえ、隣家の人の念仏は、その隣家にきこえる。戦死者の寡婦のとなえる念仏は、最も大声であった。

何ゆえ宇治や勢多の橋をひきおとさないのだろう。何ゆえわれわれは結束しないのだろう。三位中将にこのことを質問すると、次のように言われた。

この悲しい出来事は、今回は帝都においてだけのことでない。遠国近国においても同じ状態である。そして木曾の軍勢の一部は、すでに帝都に闖入しようとしている。宇治や勢多の橋は、間もなく木曾の軍勢が彼らより他のもっと有力な軍勢に備えるために、引きおとすであろう。今はもはや、われわれは、主上を奉じて帝都を去らねばならないであろう。

私は三位中将の目に涙がたまっているのを見た。私の傍にいた三人の子女たちは大声で泣いた。

堀の外は、人馬や車の急ぎ行く物音で騒がしい。人々は六波羅池殿へむかって走って行き、また走って帰る。法橋の仲間法師は、この騒ぎに逆上したらしく、あわだしく私たちのうちへやって来て、つまらないことを提言した。私たちの持物や品物を備前の瀬尾という人の館へ運んだらどうかとか、彼は瀬尾の郎党成澄というものと懇意であるとか、運賃はきわめて安く彼が請負ってもいいと言ったのである。私たちは彼を嘲笑した。天台山東坂本には、木曾の軍勢二万騎が充満しているではないか。

仲間法師は悄気てしまつて、そして帰って行つた。彼は褐色の布の衣を着て、兜だけ被つて、右手には鉾を持ち、左手に鈴を持って、それをうちふりながら帰って行つた。

今日は実に暑かった。庭の芭蕉の葉は、例年より大きくならないのだと信じていたが、さきほど見ると、去年より二倍も大きくなっていることに気がついた。芭蕉の葉かげに堅固な花が咲いていた。

七月十七日

門の外で大きな声がするので、私は垣の上からのぞいて見た。体格の大きな男が裸馬にまたがり、私のうちの門にむかって何か叫んでいるのである。彼の叫ぶ言葉は、帝都の人々の使用する言葉とは違って、容易に了解しがたいところのものであった。けれど私は、そのおおよその意味を知ることができた。——われこそは信濃の国を出て以来、小見、合田の合戦をはじめとして、北国においては彌並、黒坂、塩坂、篠原の城を攻め、また帝都近くにおいては、山門の大衆にむかっても、またいかなる合戦においても、かつて一度も敵に敗北したことがない木曾殿の家来——鳴尾五郎という名前のものである。平家一門の行った悪逆は、実に保元のころこのかた見るに見かねていたところのものである。この家の主人も、おそらく平家一門の相当の身分ある大将であろうが、その意志があるならば門をあけて出て来い。その勇気があるかどうか？

彼は藍色の布の襦袢を着て破れた腹巻をつけ、竹製の簾に矢をわずかに三本さして、彼のふりまわしている弓のつるは、断れたのをつなぎあわしたものであった。彼の頬や顎には一ぱい鬚がはえていて、彼は頭に頭巾みたいなものを被っていた。彼は五十歳ぐらいの男に見えたが、注意してみると二十前後の男にも見えた。彼のまたがっている馬は尻尾が極端に長くその先が汚れていた。馬の四本の脚のうち、三つの蹄にだけ藁の靴がむすびつけられていた。

この珍奇な来訪者は、私のうちの人々を驚かした。人々も私と同じく垣の上からのぞいて見た。

こんな場合には当然、私の父がこの来訪者を応接すべきはずであったが、父は困惑の顔つきで、郎党の一人である三郎次を召した。そして三郎次の舎弟四郎次に八丈絹四匹を与えることを約束して三郎次を説き伏せ、父の常用していた具足を三郎次につけさせた。三郎次は少し愚かな男であったので、私の父が教え込む言葉を、具足をつけながら幾度もききかえた。父は三郎次に一首の即席短歌を教えていたの

である。三郎次は具足をつけ終るまでには、どうやらその短歌を暗誦することができたらしく、彼は馬にまたがった。その馬は私の父が常用していたところのもので、たくましい馬であった。したがって愚かな郎党も、あっぱれ平家の大将軍が出陣するときの風采に見えた。私は三郎次のけなげな出陣を記念するために、彼のいでたちをここに記しておこう。彼は馬に沃懸地の鞍を置いてそれにまたがり、彼の褐色の直垂には、黄色の糸で岩の模様と白色の糸で群千鳥の模様とがぬいとりしてあった。そして彼は紫すそごの鎧をきて、鉄が打ったる兜をかぶり、黄金づくりの太刀を帯びていた。

門をひらくと、武者——三郎次は広場に駆け出した。そして裸馬にのっている敵にむかって突進した。私は三郎次のまたがっている黒馬が、その広い胸でもって敵の裸馬を突き倒すかと思った。しかし三郎次の黒馬は意外にも急角度に馬首を変え、裸馬の周囲をひとまわりして立ちどまった。裸馬にのっている武者が手にもつていた弓を鞭にして、突進する黒馬の鼻先をたたいたからである。

二人の武者は向いあって互いに相手をにらみつけた。ところが私の驚きに値したことに、裸馬の武者は脇にかかえていた棒をとり出した。そして彼は、さっき私たちが聞いたのと同じ意味のことを大声に叫んだ。彼は太刀など持っていなかったのである。私は三郎次が勝つにちがいないと思った。

三郎次は、相手の叫び声が終っても、しばらく黙っていた。おそらく彼は、私の父が彼に教えた即席短歌を忘れてしまったのであろう。しかし三郎次の武者ぶりは誰にも劣っていなかったようである。彼は鎧をふんばり両手をひろげて立ちあがり、大音声をあげた。

「遠くで見ている人たちは私の言う声をきいてくれ。近くにいる人たちは目でよく見てくれ。私こそは平家で有名な平中納言三位知盛といつて、一騎当千のつわものである。速やかにうちかかって来い。」

彼は自分自身をそういう工合に大げさに紹介したが、その言葉こそ私の父が戦場で用いるべきところのものであった。彼は大声をはりあ

げている最中に、二度ばかり私や父の方をふりかえって見た。

彼の言葉が終わると同時に、彼と彼の相手は、馬にまたがったまま格闘をはじめた。裸馬の騎者は、力量において三郎次よりすぐれていた。彼は左の手でもって三郎次の肩をつかみ、右の手でもって三郎次の頭をつかみ、そして造作なく三郎次の首をねじ切ってしまった。三郎次の胴体からは四尺ばかりの高さに血潮の噴水がほとばしり、胴体みずからを赤く染め、土地にも血潮の斑点をしるした。裸馬の騎者は、三郎次の胴体が黒馬の鞍から落下するより先に、三郎次の黄金づくりの太刀をうばいとり、それを裸馬の手綱にむすびつけた。三郎次の胴体は鞍の上で安定をたもち、馬はすでに意志のなくなった騎手をのせたまま、この動物も意志を失ったかの如く静かに立っていた。

裸馬の騎者は、あくまで盜癖がつよかった。彼はむしりといった三郎次の頭を兜から抜きすてようとして、兜の鍔形を持って三郎次の首級を乱暴に振りまわした。そこで三郎次の頭が兜の鍔から抜け落ちると、その兜を自分の頭にかぶった。

私はこの格闘のこれ以上の経過を見ることができなかった。私は垣のかげにかくれてかたく目を閉じた。こんな残忍な出来事はあるべきことでない。私は兵変というものを嫌悪する。けれど今度の兵変は、まだようやくその発端に達しようとしかけているにすぎないではないか。

七月十八日

三郎次の仇敵は、馬も鎧もすっかり奪いとって行ったということである。私には昨日の父の態度が了解できない。父の言うところによると、父は私たち一族のために、したがって平家一門のために三郎次を犠牲にしたのだという。私はこういう誤謬を憎む。そして父の勇敢でなかったことは父のために気の毒であったと思う。

今は夜更けである。去年、太秦の寺に一泊したことがあるが、小川のながれる音や森の木の枝や葉のゆれる音にさまたげられて、私はと

ても眠れなかった。しかし今はその反対にあまり静かすぎるので眠れそうにない。——昨日の夜も眠れなかった。門の外で、だしぬけに剣戟の音がきこえたり、また急に静かになったり、再びその物音がきこえて、すぐに静かになったりした。その物音というのは、わずかに二三度ほど剣を打ち合わす音にすぎなかった。けれど剣を打ち合わせる彼らは、そのいづれの者が、剣戟の音が消える瞬間に死んだのである。今夜もあの物音がきこえるかもしれない。

木曾の軍勢は五万余騎であるという。新中納言の言われるには、彼らよりも天台山の衆徒が先に帝都へ攻め入るであろうとのことである。この前、一門の公卿十人が連署の願書をつくって山門へ送られたが、山門の大家はその願書をうけつかなかった。すでに彼らは木曾の軍勢へ合力の返牒を送ったという。私たちはすこしもこの事情を知らなかった。新中納言は、われわれの手後れであると申された。

私たちがもし個人的に没落からまぬがれようとして、落飾したり変形したりして山門の大家に加わったにしても、それは徒勞である。山門の大家は私たちと同じ階級の一つの変態にすぎなかったが、彼らは新来の勢力に合流した。私たちの変態階級のみが残り、私たちは自体は亡びようとしている。三条に住まいしている陰陽師は、これこそ順序というものであると申された。

七月十九日

いつでも出発できるように用意してはならない。六波羅池殿では、今日、終日評定があった由。私たちが出発するときには、帝都のあらゆる建物へ放火するのだという。私たち一門の経營の跡は、すべて空しくなってしまうであろう。私の父は庭の竹柏の枝に宿っている風蘭の葉一つにさえ愛着があると云った。改築された朱雀門の大柱のほぞには、私の幼いときの名前が三つも書いてある。あの柱も焼けてしまふに違いない。かつて私は朱ぬりの柱の焼ける有様を見たことがある。あたかも巨大な鉄棒が白熱して火焰を噴出するのと同様に

見えた。

衣紋のあわせかたや烏帽子のかぶりかたまで、すべて何ごととも六波羅様でなければ威張れなかったのだけれど。私たちの六波羅！それは私たちの父であり母である。

七月二十日

木曾の家来と称する狼藉者が再び門前に来た。一昨日の男とは別の男で、今度の者はさらに残忍であったという。私は出て見なかった。彼らは私たちからすべてを奪いたいのだ。食欲がない。恐怖のためであろう。

七月二十一日

今日も木曾の家来が来た。彼らは婦女子には危害を加えない。軍律が行きわたっているであろう。こういう軍勢は合戦に強いに違いない。

七月二十二日

今日は木曾の家来が三人も来た。私たち一門の意志が、あたかも妖怪の行路病者になっているのだ。その妖怪は足を食われ手の指をひきぬかれて、しかも恐怖に身をふるわせてばかりいる。けれども何らの方法もありはしない。

午後、修理大夫の館に行く。父の書状を持って、侍五騎を連れる。

その途中、蠅松殿の裏門のあたりで、木曾の侍一人に出会した。彼はどこで強奪したのか烏帽子をかぶり、それを六波羅様にかぶっていたが、袖のかかりや指貫の輪にいたるまで、実に頑固な着こなしかたをして牛車に乗り、ふんぞりかえっていた。彼は某の大臣に買収されて、その館を訪問していたにちがいない。牛は見事に飼われた逸物である。帝都第一流の牛飼いでなければ、これほどまでに飼いそだてられるものでない。

木曾の侍は私たちが近づくのに気がつく、彼は氣取った手つきで

扇をつかいはじめた。私たちは彼と並んで馬を進めたが、彼はもしも私たちが敵対すればいつでも応戦する意志の目くばせをしてみせた。彼はその牛飼いに「扇のつかいかたはこれでいいだろう。都会人らしく見えないか？」という意味のことを質問して、しきりに扇をつかってみせた。私たちは主従六騎は、彼の言葉つきの風変わりなのをきいて、失笑した。すると彼は大声で牛飼いに言いつけた。

「車をとめろ、車をとめろ！」

そして彼は突如にも車の後側からとび降りて、太刀をぬき、喚きながら私に斬りつけようとした。私の侍一騎は、この狼藉者の右の腕を斬り落した。地面に落ちた腕は、単独に太刀の柄をにぎっていた。私は私の侍を制止して、あえて片腕の不具者を殺さなかった。不具者は彼の腕を遺棄したまま逃走して、土塀の曲り角に姿をかくした。

私は興奮した。しかし修理大夫の館にかけつけてみると、そこでは人々が笛を吹く稽古をされていた。

七月二十五日

昨夜、深更に及んで、法皇は右馬頭たった一人を御供にして、御所を出でさせ給うた由。御行方を知るものは一人もない。

——中略——前の大臣をはじめ一門一族の人々は主上を奉じて帝都を出発した。私の父はいつもうたいつけている短歌や朗詠をくちずさみ、自分が狼狽していないことを示そうとしたが、私は父が常軌を逸していることに気がついた。父は砂金を入れた大きな袋を馬の鞍にむすびつけると、その袋が破れて、破けたところから金色の砂が絶えずこぼれ出るのさえも知らなかった。

私たちの旅は、その前途が遠いらしい。そして誰もその目的地を知っていない。夕暮れどきになって、私たちの同勢は七千余騎であるということが概算された。夕方の太陽は、私たちの進んで行く正面の角に沈んだのである。日が暮れてしまうと、帝都の方角では空が一面

に赤くなり、その明るみは、うなだれて馬にまたがっている人々の後姿を照した。もし後をふりかえってみる人があったとすれば、空の赤色の明るみが、その人の悲しげな顔を照明したのである。私たちは帝都を出発するとき、六波羅殿、小松殿、八条四条その他、一門の人の家々三十余箇所、ならびに一族郎党のそれぞれの宿所、京白川の五万軒の民家に火をかけて一せいに燃えあがらせておいたのである。けれど人々は、急ぎ足に前へ進もうとしなかった。

私は馬上で居眠りをしがちであったので、しばしば侍たちに注意された。

今宵の野営の陣において、これをしたためる。

七月二十七日

昨夜は数人の雑兵が脱走した。けれど誰も彼らを非難するものはない。私たちは旅の目的地を知らないからである。

今日は七月二十八日であるかもしれない。私は正確な月日を失念した。しかし私は、僚友に質問するのを我慢しよう。相手を悲しませるだけである。日附というものは、希望を抱いている人にとってだけ必要であろう。

時刻すぎたころ旧都（福原）に着いた。三年前の夏まで、私たちはここで暮したのである。そのころ私は、歩道の石だたみの上を駆けまわることが最も好んだ。私の脊はささやかな音をたて、その音は歩道の両側に並ぶ土塀に何と好ましく反響したことであった。私はわざと蹴鞠を歩道にころがし、その後を追いかけたのである。

けれど今はもはや、その石だたみには苔が密着し、しき石のことごとくの隙間には、種々なる草が生い茂っている。げんのしょうこ、おぼこ、すすき、おみなえし、等々。

人々は分宿した。私は浜御所に宿泊することになった。この建物も他の建物と同じく荒廃してしまって、軒が曲り、屋根に大きな穴が空いている。その穴から夜空と月とが眺められる。廻廊には数多の海鳥

が群がって羽ばたきしている。

七月二十八日

二十九日であるかもしれない。

朝早く内裏に火をかけた。火焰は泉殿に燃えうつり、つづいて松陰殿、馬場殿、二階棧敷殿、雪見御所、岡御所、浜御所という順序に焼けてしまった。浜御所の築垣には、おびただしく藁がからみついて、藁の葉は、ようやく秋色ふかかろうとしているところであったが、火焰にあおられて、ひとたまりもなく藁の朽ち葉に変化した。

人々は民家を訪ねて、米石を買収した。絹一疋の代金で米一石一斗の計算であった。帝都の相場より安いと人々は言っていた。一軒の民家で、私は年老いた婦人に質問された。何の理由で旧都の建物を焼くのであるかと彼女は質問したのである。私はそれに対する答えをしないうで、彼女にこの土地をたちのくようにすすめた。

海岸には大船や小船が集合していた。誰かが手まわしよくまねき寄せておいたものであろう。人々は先を争ってそれらの船に分乗し、沖に漕いで出た。木曾の軍勢の一部が押しよせたという流言が伝わったからである。

七町ばかり漕ぎ出たとき、私たちは、味方の三人の騎者が船に乗りおくられていることに気がついた。三人の騎者は海の中へ馬を乗り入れて、手をうち振り何か叫んでいるらしかった。私たちの船にむかって待ってくれと頼んでいたらしい。

ところが私たちは、渚に二十余騎の木曾の兵が馬を駆けさせているのを発見した。彼らは彼らの軍勢の偵察隊であらう。私たちの船からは二人の侍が遠矢を射た。敵の二十余騎は勢いよく馬を駆けさせながら、船に乗りおくれた三人の騎者を標的にして矢を放った。矢は水面に達すると水中に潜り、それから静かに浮かび出で、水面に横たわろうとした。敵の二十余騎は、その必要もないのに渚を駆けまわり、あたかも馬場において馬上弓術を稽古するときのごとき軽快な態度であ

った。

このささやかなる退却戦では、三人の騎者も敵兵も何らの損傷をうけなかった。三人の騎者は弓を高くさしあげながら、私たちの船に近づいて来た。尾張守と長門守と備中守とであった。彼らは船に近より、乗馬の鞍から船に乗りうつった。彼らの鎧からは海水がしたたったのである。

彼らの乗馬は海中にとりのこされて、この三びきの動物たちはそれぞれの騎者を哀願の目つきで眺めた。けれど私たちの船も他のいづれの船も、すでに人馬を満載していたので、気の毒な三びきの馬を收容してやらないことにした。船の人々は弓を振ったり叫んだりして、三びきの馬を渚へ追いかえそうとした。しかし動物たちはそれぞれ自分の騎者を敬慕して、船のあとを追って来た。彼らはいずれも水面から首を高くさしあげ、しばしば甲高いなないた。朝の太陽はその光線の工合でもって、三びきの軍馬の姿を逆さまに水面に映し、そこに斬新な動物模様が描かれたのである。動物たちは疲れたらしく、苦しげに泳いだ。

長門守は矢をとって弓をしぼり、彼の愛馬をねらっていたが、やがて次のように呟いた。彼の愛馬は常々の性格から推察すると、溺死するまで騎者のあとを慕って来るであろうと呟いたのである。しかし長門守は矢を射放ちはしなかった。彼は弓を舷に置いて、その弦が潮に濡れて用をなさないと人々に告げた。私たちは安堵した。

尾張守の乗馬は、泳ぐことが達者ではなかった。次第に私たちの船と遠ざかりつつあったが、追いかけることを断念して、渚の方へ泳いで行った。そして脚の立つ浅瀬まで泳いで行くと、私たちの方をふりかえって二度ほどいなないた。

備中守の乗馬は私の知らない間に姿をかくした。溺れてしまったのであろう。この馬は月毛であった。

八月十六日

私たちの船では、三位中将が最もはげしく船えいされた。三位中将は、ふなばたから手をさし出して海水を掬おうとされたが、どうしても駄目であった。何故かというに、三位中将は悲しさのために手の指に少しも力をこめることができなかったからである。すでに私も船えいしていたが、私は海水を両手で掬い、口を含嗽することができた。私と三位中将とは、ふなばたに二人ならんで海水へ手をさし出していたが、三位中将は私に含嗽する様子を装って海水を飲んでは毒になるとおっしゃった。私たちの兵船も戦友の兵船も飲用水を失いつつあったので、私たちはお互いに水を節約しようとしていたのである。三位中将は従卒に命じ、私のために器に一ぱい飲用水を持って来させた。私は飲んだ。

昨日、陸地へ飲用水を汲みに行った兵船は、夕方になっても私たちのところへ帰って来なかった。その船の船腹には、竜頭丸という文字が書いてあった。今朝まで私たちは船の速力をゆるめながら待っていたが、それでも竜頭丸は帰って来る気配がなかった。三郎成澄の申すには、たぶん竜頭丸の船夫たちが逃亡して兵卒たちは帰ることができなくなったのであろうというのであった。人々は三郎成澄の説に反対も賛成もしなかった。人々は黙っていた。おそらく人々は、竜頭丸に乗っていた人たちが自らが、陸つたいに逃亡したことを考えついたのであろうと思われる。

八月十七日

今日は終日、主上の御船と私たちの船とが並行して進んだ。御船の船首近くに御殿の模型みたいなものが設けられてあった。三郎成澄は御船の船夫たちに、あの御殿は誰が造ったのかと質問した。船夫たちは九郎丸が造ったのであると答えた。三郎成澄は九郎丸とはどういう人物であるかと質問した。一人の船夫が體をこぎながら、自らが九郎丸であると答え、そうして、彼は帝都の御殿をまだ一度も見たことがないために、あるいは彼の造った御殿は宮中の礼式にかなっていない

かもしれないと言った。三郎成澄は、あの屋根の上に飾ってあるものは何かと質問した。九郎丸という船夫は、あれは船板を削ってこさえたものであって、彼の考えでは鳳凰の鳥のつもりであると答えた。成澄は淡路から召された武士であるが、彼も御座所のことについては何も知らなかったらしい。三位中将のおっしゃるには、三郎成澄はあまり饒舌家なので困るということであった。三位中将は三郎成澄を呼びよせて、成澄にごくつまらない役名を与えられた。成澄ははなはだ喜んで、彼の興奮状態は夜になっても消えなかった。彼は主上の御船の船夫九郎丸と夜おそくまで談話した。私は彼らの談話により、彼らが私たち一門の階級や勲等をあくまでも尊重していることを知った。彼らは私たちの階級に附属することができるとすれば、彼らの故郷へ帰らなくてもいいとさえ思っているらしい。

私は彼らの欲望こそ笑止なものであることを知っている。しかし私たちの階級は、彼らのそういう欲望を利用しなくては彼らを支配することができないだろう。彼らは私たちの階級を支持するために、規則や制度によって傷ついて、そして彼ら自ら苦しむのである。

今宵、ただいま私たちは、小さな島に碇泊しているのである。私たちの兵船は岸近くの海上に互いに横に結ぶつけられ、私たちは島に上陸しているのである。岸近くの兵船には五人の武装兵がいる。そして武装兵は船をあやつる術を知らない。したがって誰もこの島から脱走することができないだろう。私たちは互いに安心して眠ることができる。

この島は箕島という名前であるという。明日も私たちはこの島で休養するということである。

八月十八日

島は三つの岡の集まりみだいである。岡と岡との間のくぼみには竹藪がある。私は竹藪のなかを通りぬけて岡の頂上にのぼった。そこはほとんど平坦な草原で、私は一本の灌木のかげに宇治大納言が休息し

ていられるのを見つけた。大納言は年老いたる功臣である。

彼はそこに足をなげ出して坐り、何かしきりに咀嚼しているところであった。白い頭髪は随分きたなくよれ、頭が動くにしたがつて頭髪が動いた。彼は私に、連日の航海で疲労しはしないかとたずねた。私は疲れはないが船えいする癖があると答えた。老人は私にもそこへ足をなげ出して坐れと言って、それから次のように話した。

——私はもうしばらくしか生きていない老人であるが、どうしてこんなに生きていたいのか自分でもわからない。この疑問に答える人間は一人もないであろう。私たちは何処の場所へ逃げて行くのか誰も知っていない。

そう言ってこの年老いた功臣は、やさしげに私の頭に手を置き、私に幾歳になるかと質問した。そして彼が寝間着姿のまま食事をしていのを見つけられたことは、一生の不覚であると告白した。

この島は大きな川の川口にある。川の水がこの島にぶつかり、左右にわかれて二つのながれとなって海にそそいでいる。

八月十九日

室の津という港に上陸した。古めかしくかつさやかな漁師町である。私たち全員は武装して、婦女たちのみでなく私たち若年のものも薄化粧して町にくりこんだ。沿道の民は低くひざまずいて私たちを出迎えた。もしこの町の人たちが私たちに反抗する気配があったなら、私たちは町全体の民家に火を放とうというのであった。

町の後の山に小さな高矢倉が急設され、一隊の兵士が派遣された。私たちは本陣を山の麓に敷いた。山の中腹から私たちの陣を見おろすと、それは全くの密集部隊になっていた。

私は一軒の民家の庭に梨の木を見つけ、梨の木の傍に一人の少女が立っているのを見た。それは私の乗馬が坂をかけのぼり、この家の庭を横ぎろうとするときであった。少女は花卉の種子みたいな黒い瞳におどろきの様子を示して私を見た。彼女はごく拙く六波羅風に頭髪を

むすんでいた。おそらく彼女は、今朝ほど平家の子女たちの風俗や頭髮を見て、それを早くも真似たのであろう。これは六波羅においてさえも最新流行の鬘の型で、しかも結婚した女の結髪風俗であったのだ。私は梨の幹のかげにかくれた少女を十分に眺めようとして、私の乗馬をとどめた。彼女は幹から顔を半分ほど現わして私を眺めていたが、それは赤面した可憐きわまる顔であった。彼女は帝都からやって来た一人の騎馬武者を物珍らしく思ったのに違いない。あるいは彼女は私をすぐに好きになったのかもしれない。私は六波羅言葉で彼女に質問した。

——その梨の実熟しているようだが、私たちが帝都を出発するとき、帝都においてはまだ梨の実熟していなかった。今はすでに秋たけなわである。

少女は梨の木の幹にすっかり顔をかくして次のように答えた。私は彼女の田舎言葉を好ましく思った。

——よく走る馬に乗って坂路をかけのぼっても危険ではなかったか？ この梨の実熟してはいないけれど、もし渴きを覚えるならば幾個でも食べていい。

私は馬から降りて馬の手綱を彼女に持たした。そうすれば彼女はいくら恥かしくても、家のなかに逃げこまないからであった。彼女は恐怖のために青ざめた顔をして、手綱の最も端を指つまみ、もし馬があばれだせばいつでも逃げだせる姿勢をつくっていた。私は彼女に、彼女の父や兄弟が留守であることをたしかめてから、竹竿でもって梨の木の枝をたたいた。梨の実私の乗馬の首や鞍の上に落ち、かたい地面に降りそそいだ。水っぽくて固い果実が土地を打つ音をたてた。何という爽やかな音であらう。私は竹竿ではげしく木の枝をたたいた。梨の実少女の足もとに一せいに降りそそいだ。けれど彼女は恐怖のために目をつむり、梨の実が彼女の肩を打っても身動きもしなかった。

同じ日の夜——

約束の時刻に約束の場所で、私はその少女に会った。

私は夜警の戦友にとがめられても言いのがれ得るために、私も夜警の人びとと同じ風俗をして出かけたのである。約束の場所というのは断崖のふもと砂浜で、もすこし時刻がおそろければ満潮の波はこの砂浜を海に流してしまうかもしれない。彼女は海水の干満時刻を正確に知っていたが、密会場所を心得ていなかったというべきである。私は私たちの会合の多感なところのために、何故こんな場所を指定したかと彼女にたずねた。こんな波打際ではすぐにも潮が満ちてくるであらう。お前はほんの短い時間だけ私に会うつもりで、こういう束の間の干潮の場所を選定したのであらうと、私は彼女にそういう無理なことを言った。彼女は驚きの表情で私の顔を眺め、そして私の顔をよほどしばらく眺めた後、私の質問を否定する意味で彼女の頭を小刻みに左右に振った。それから大きな溜息をもらしてうなだれたが、すでに彼女は泣きだしていた。

半分に欠けた月が——私はこういう形の月をしばしば帝都の私の家で眺めたが——赤鉄鉱色の光をはなつて向うの島の上にあらわれた。その光は私から顔をそむけた少女の頭髮と頸を照らした。私は彼女が今は念入りに襟ぐびにまで化粧をほどこしていることに気がついた。けれどおそらく彼女は一個の鏡を持っているだけであつたのか、それとも急ぎがちに化粧したものかそのいずれかであつたのだろう。襟ぐびの化粧はその技術が完全であるとはいえなかった。彼女の頭髮の結いかたは、昼間のときよりもさらに私たちの六波羅風のものに似て、それが月光を浴び、結髪したのであることが明らかであった。

私は彼女に泣くのを止させるために、その頭髮はお前に似合いかつ完全に六波羅風であると言った。私の語尾は何故か少しふるえた。彼女はすぐに泣くのを止して、この頭髮は母に手つだつてもらつて結いあげたと言った。そして彼女は、ここの砂浜では少し大声にしゃべっても、誰にもきこえないと言ふのであつた。

私は彼女に、潮のしぶきが私の衣服をぬらしてもかまわないと告白